

都道府県 番号 4 0	学校名 福岡県立博多青松高等学校	課程 定時制	学科 普通科	指定期間 平成29年度
----------------	---------------------	-----------	-----------	----------------

平成 2 9 年度 高等学校における特別支援教育推進のための拠点校事業 実施報告書（成果報告書）（要約）

1 研究開発課題

「生徒や学校・地域の実態を考慮した通級指導の実施形態に係る研究」

2 研究の概要

中学校から引き続き通級による指導を必要とする生徒や、これまで適切な支援を受けることなく困難さを抱えたままの生徒に対して、在籍校の教育課程や所在地等の条件に関係なく、適切な指導や必要な支援を行うために、高等学校における通級による指導の実施形態について実践研究を行う。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究開始時の現状分析と研究の目的

ア．現状の分析

福岡・筑後地区には、県立高等学校が全日制・定時制・通信制を合わせて 6 5 校あり、平成 2 9 年度は、中学校までに通級による指導を受けた経験のある生徒が約 9 0 名在籍すると想定される。また、その約 6 5 % が L D ・ A D H D の通級指導を受けた生徒である。

イ．研究の目的

在籍校の教育課程や所在地等の条件に関係なく、特別な支援を必要とする生徒に対して等しく適切な指導や必要な支援を行うために、高等学校における通級による指導の効果的な実施形態等について実践研究することを目的とする。

（2）研究仮説

ア．拠点校における他校通級を行うことにより、発達障がい等のある生徒に対し、自己理解や他者理解を深めさせるとともに、コミュニケーション能力等、将来の自立と社会参加に必要なスキルを習得させることができる。

イ．他校通級と在籍校訪問を通じた実態把握等の併用を研究することにより、在籍校の所在地等の条件に関係なく、効果的な支援を行うことができる。

（3）必要となる教育課程の特例

教育課程外で他校通級を行うため、特例等は必要としない。

（4）研究成果の評価方法

ア．通級指導教室に通う生徒が在籍する学校に対して、当該生徒の困難の改善・克服の程度等に関するアンケート調査を実施する。

イ．特別支援教育や医療等の専門家からなる外部専門委員会を設置し、専門的見地から実践の成果と課題を検証する。

4 研究の経過等

(1) 取組の内容(通級による指導の実際(授業時数、目標と内容・方法、教材等))

ア. 生徒Aについて

(ア) 通級による指導で付けたい力

一人で公共交通機関を利用して、通学することができるようになる。

(イ) 指導の概要

通級指導教員とコミュニケーションを図りながら心理面・体調面に配慮し、体験活動をさせる。

(ウ) 主たる活動

- 自分が思ったことを相手に伝える力を身に付ける活動
- 将来の自立と社会参加に必要な力を身に付ける活動

(エ) 指導日時、指導目標、指導内容について

指導日時	指導目標	指導内容
第1回 9月26日 (火)	・自分がなりたい姿を自分の言葉で話すことができる。	・生徒の心理面・体調面に無理をさせないように、対話を通じて将来、どのようになりたいかを表現させる。
第2回 10月3日 (火)	・自分で切符を買って、電車に乗り、出かけることができる。	・生徒の心理的安定を図るため、様相観察をしながら体調面を考慮し、教員がモデルを示して、体験活動をさせる。
第3回 10月10日 (火)	・自分が行きたい場所を相手に伝え、行きたい場所に一緒に歩いて行く。	・生徒の様相観察をしながら、心理面・体調面をサポートし、生徒に達成感を持たせる。
第4回 10月17日 (火)	・分からないことを自分から聞いて、苦手なことに挑戦する。	・英語の教材を通して、対話を作り出し、双方向のコミュニケーションを図る。
第5回 11月7日 (火)	・自分の考えをまとめて、自分の言葉で表現する。	・国語の教材『羅生門』を通して、自己と対話させ、自分の思いを自分の言葉で表現できるよう支援する。
第6回 11月21日 (火)	・自分で切符を購入し、家族以外の人と公共交通機関に乗り、目的地に行くことができる。	・生徒の様相観察をしながら、心理面・体調面をサポートし、生徒が自分の力でできそうなことはできるよう支援する。
第7回 12月5日 (火)	・興味のあることについては言語活動を通じて、不得意なことについては興味が湧く方法で理解することができる。	・英語の教材と地理の教材を使用して、双方向のコミュニケーションを生み出す。 ・英語は言語活動、地理は生徒が知っていることを意味づけしてコミュニケーションを図る。
第8回 12月12日 (火)	・働くために必要なことについて考えることを通して、自己理解を深め、他者とのコミュニケーションを図る。	・自分にできることとできないことをランキングして整理させることで、視覚的にとらえさせ、自己理解を図る。
第9回 1月16日 (火)	・期末考査の結果を振り返ることを通して、双方向のコミュニケーションをとる。	・できたことと分からなかったことを理由とともに相手に伝わるように表現させ、振り返らせる。
第10回 1月23日 (火)	・自宅から拠点校まで、拠点校から在籍校まで、通級指導教員と一緒に公共交通機関に乗って行くことができる。	・自分で目的地までの切符を買い、目的地までの経路について、見通しを持たせるよう支援する。

イ. 生徒Bについて

(ア) 通級による指導で付けたい力

自分に自信をもつことができるようになる。人と双方向のコミュニケーションをとることができるようになる。

(イ) 指導の概要

対象生徒が興味・関心のある話題で対話することを通して、心理的安定を図るとともに、自尊感情を育む。様々な教材で言語活動の充実を図る。

(ウ) 主たる活動

- 自己理解を深める活動
- 自分が苦手なことを相手に伝えたり、必要な援助を的確に伝えたりする力を身に付ける活動
- 将来の自立と社会参加に必要なとなる力を身に付ける活動

(エ) 指導日時、指導目標、指導内容について

指導日時	指導目標	指導内容
第1回 9月26日 (火)	・自分の進路に向けての意欲や将来の展望を持つことができるようになる。	・リラックスする雰囲気を作りながら、ライフステージで自分が今どの位置にあるかについて対話を通じて考えさせる。
第2回 10月 3日 (火)	・自分の考えを自分の言葉で表現し、相手に的確に伝えることができる。	・生徒の状況把握や心理的安定を図りながら、数学の教材で対話を生み出す。 ・働くことの本質について考えさせる。
第3回 10月10日 (火)	・入試に向けて必要なことを整理し、入試に向けて見通しを持つ。	・入試に向けて必要なことを通級指導教員と一緒に考えて書き出し、予定を立てることで見通しを持たせ、心理的安定を図る。
第4回 10月24日 (火)	・入試に向けて必要なことを整理し、入試に向けて見通しを持つ。	・安心させるために、優先することを通級指導教員と一緒に考え、優先順位の付け方のモデルを示す。
第5回 11月 7日 (火)	・入試に向けて必要なことを準備し、不安を解消する。	・面接試験のシミュレーションを行い、伝え方の型を示して実践させ、通級指導教員が評価して、客観性を持たせる。
第6回 11月21日 (火)	・期末考査と資格試験までの計画を立てて、すべきことの見通しを持つことができる。	・立てた計画を口頭で説明させる。説明が不明確な場合は生徒の中にある言葉を引き出すように支援する。
第7回 12月 5日 (火)	・季節のオーナメント作りを通して心理的安定を図り、コミュニケーションをとる。	・通級指導教員と対話しながら作品を作らせる。完成した状態をイメージさせ見通しを持たせる。
第8回 12月12日 (火)	・見通しを持つために必要なスキルを身につけ、心の安定を図る。	・メモの取り方とその意義を伝える。 ・大学に入学した時のことをイメージして、冬休みの過ごし方を考えさせる。
第9回 12月19日 (火)	・受験に向けて準備をし、心の安定を図る。	・受験科目で忘れていた分野を指導することで、生徒の不安を解消することと、双方向のコミュニケーションをとる。
第10回 1月16日 (火)	・将来に向けて快適に生活するために、ストレスとのつきあい方を知る。	・少し先の将来に見通しを持たせることで、起こりうることを考えさせ、快適に生活するためのスキルを伝える。
第11回 1月23日 (火)	・自分のことを言葉で表現することで自分を客観視し、それを相手に分かるように伝える。	・過去・現在・未来の自分を見つめるよう、問いかけをするなどして適宜支援する。

ウ. 生徒Cについて

(ア) 通級による指導で付けたい力

自分に自信をもつことができるようになる。人と双方向のコミュニケーションをとることができるようになる。

(イ) 指導の概要

対象生徒が興味・関心のある話題で対話することを通して、心理的安定を図るとともに、自尊感情を育む。様々な教材で言語活動の充実を図る。

(ウ) 主たる活動

- 自己肯定感を持たせるための活動
- 他者を理解するための活動
- 将来の自立と社会参加に必要なとなる力を身に付ける活動

(エ) 指導日時、指導目標、指導内容について

指導日時	指導目標	指導内容
第1回 9月28日 (木)	・相手の言葉の意味を理解し、それを踏まえて自分の考えを相手に伝えることができる。	・通級指導教員が自分自身の経験を踏まえつつ、生徒の進路についての話を聴く。
第2回 10月5日 (木)	・自己紹介を通して自己理解を深め、自尊感情を高める。	・通級指導教員が教師を選んだ理由を伝え、生徒に自分自身のことについて考えさせる。
第3回 10月12日 (木)	・自他の考えを大切にすることができるようになる。	・自分の考えとは違う考えと出合わせることで、どのような考えも正しいことを理解させる。
第4回 10月19日 (木)	・社会で求められる人材について理解する。	・「会社が求める人材」を提示し、自分事として考えることができるように生徒の日常生活に結び付けて伝える。
第5回 10月26日 (木)	・身だしなみについて理解する。	・身だしなみについて理解させるために生徒が興味・関心のある話題を提示しながら、双方向のコミュニケーションを図る。
第6回 11月9日 (木)	・興味・関心のある事柄などを通して、自分に自信をもつ。	・近況報告で出た話題を生徒の関心のある話に関連づけて、生徒から話を引き出す。
第7回 11月16日 (木)	・違う視点で物事をとらえて、自分に自信をもつ。	・生徒のストレスを軽減するために、格言や興味のある話題を通じて、異なる価値観を示す。
第8回 12月7日 (木)	・広い視野で自分をとらえて、自分に自信をもつ。	・定期考査の結果を自己分析させ、反省だけではなく、様々なものの見方を提示し、自分に自信を持たせる。
第9回 12月14日 (木)	・季節のオーナメント作りを通して、心理的に安定するとともに自分に自信をもつ。	・作りながら会話をすることで心理的安定を図り、物作りに挑戦し完成することで、達成感を持たせる。
第10回 12月21日 (木)	・季節のオーナメント作りを通して、苦手なことに挑戦し、作品を完成させる。	・作りながら会話をすることで心理的安定を図る。苦手なことにに対して最後まであきらめないよう支援する。
第11回 1月18日 (木)	・心身の健康のために必要なことについて理解し、体得しようとする意欲を持つ。	・会話を通じてコミュニケーションを図り、不安感を取る。気持ちに寄り添いながらストレスの対処法を一緒に考える。
第12回 1月25日 (木)	・通級指導を振り返り、それを文章や言葉で相手に伝えることができる。	・振り返りを文章で書かせ、問い掛けをしながら自分の思いを引き出す。それを自己理解に結び付けていく。

エ. 生徒Dについて

(ア) 通級による指導で付けたい力

自己理解ができるようになる。相手に伝わるように挨拶と返事ができるようになる。

(イ) 指導の概要

心理的安定を図るとともに、通級指導教員との信頼関係を築くために、様々な教材を使ってコミュニケーションを図る。

(ウ) 主たる活動

- 心理的安定を図る活動
- 自己理解を深める活動
- 将来の自立と社会参加に必要となる力を身に付ける活動

(エ) 指導日時、指導目標、指導内容について

指導日時	指導目標	指導内容
第1回 9月29日 (金)	・日常生活を振り返り、なりたい自分を考える。	・リラックスできる雰囲気を作り、心理的安定を図る。自分の好きなもの・好きなことを伝えることで、自分を客観的に見つめさせる。
第2回 10月6日 (金)	・自分のことを人に伝えることができる。(自己紹介することができる。)	・通級指導教員が自己紹介等のモデルを示す。自己紹介させることで自分を客観的に見つめさせる。
第3回 10月13日 (金)	・人とのかわりにおいて基礎となる挨拶をすることができる。	・「脳トレ」を使って、通級指導教員とのコミュニケーションを図る。最初と最後の挨拶ができるように丁寧に指導する。
第4回 10月20日 (金)	・自分の思いを相手に言葉で伝えることができるようになる。	・リラックスさせる場面と負荷をかける場面を作り、生徒ができるところまで指導・支援する。
第5回 10月27日 (金)	・相手に応じて自分の思いを言葉で伝えることができるようになる。	・リラックスさせる場面を設け、生徒の心理的安定を図る。負荷をかける場面では生徒が頑張ることができる課題を設定し、支援する。
第6回 11月10日 (金)	・身体を動かすことで心身をリラックスさせ、信頼している人と積極的にかかわる。	・生徒の心理状況と体調を観察しながら指導する。会話を楽しみながら指導する。
第7回 11月17日 (金)	・身体を動かすことで心身をリラックスさせ、信頼している人と積極的にかかわる。	・生徒が行いたいと言ったバドミントンをすることで、心理的安定を図る。適切でない動きの時も根気強く支援する。
第8回 12月1日 (金)	・自分のしたいこと・したくないこと、自分のできること・できていないことをランキングすることを通して、自己理解をする。	・働くことについて考える教材を使う。生徒が分からない言葉は丁寧に説明する。生徒の言葉を引き出しながら指導する。
第9回 12月15日 (金)	・親しい人とコミュニケーションを図ることができる。	・「色パズル」「間違い探し」をコミュニケーションツールとして、双方向の対話を生み出す。
第10回 1月19日 (金)	・ゲームを通じて言語活動をし、双方向のコミュニケーションを取る。	・表情を観察しながら心理的安定を図り、言葉を正確に言うことができるように根気強く支援する。
第11回 1月26日 (金)	・通級指導を振り返ることで、自分の変化などに気づくことができる。	・生徒が理解できる表現で問い掛け、さらに毎回の指導内容を想起させ、自分の変容に気付くよう支援する。

(2) 評価に関する取組

ア. 外部専門チームの設置

教育的、心理的及び医療的な観点から通級による指導の対象となる生徒の指導内容及び体制並びに必要な支援に係る助言等を得るため、学識経験者（特別支援教育の専門家）、医師、臨床心理士等5人の委員で組織する専門チームを設置した。

なお、通級による指導の円滑な運営を図ることを目的として、当該委員が出席し、必要な協議等を行う連絡会議を年2回開催することとした。

イ. 第1回外部専門委員連絡会議（平成29年7月20日）

専門チームの助言等を踏まえ、通級による指導の対象となる生徒の判定及び診断的評価を行うとともに、実態把握のための調査票や指導記録用紙等の様式の改善を図った。

個々の生徒に対する評価事項や指導上の留意点等は、実際の指導開始前の段階で通級による指導を行う拠点校に報告され、指導体制構築の一助となった。

各拠点校 対象生徒	○本人・保護者の思い（卒業までに身に付けたい力等） ●専門チームの助言による指導上の留意点等（一部抜粋）
生徒A	○公共交通機関を利用して、一人で行動できるようになりたい。 ●本人・保護者の思いに寄り添った支援を行っていくこと。
生徒B	○臨機応変に対応できるコミュニケーション能力を身に付けたい。 ●自分に必要な援助を的確に伝えることができるよう支援すること。
生徒C	○状況に応じた言葉遣いや計画的な行動ができるようになりたい。 ●上手くいくコツ、具体的な方法等を指導の一環として教示すること。
生徒D	○自分の思いを適切に人に伝えることができるようになりたい。 ●通級による指導だけでなく、関係機関とつなげていく必要がある。
全 体	●保護者の思いや願いだけでなく、実態に応じた支援を行うこと。 ●具体的な能力の伸長よりも、ライフスキルに関する支援を行うこと。 ●自立や社会生活に結び付くための自立活動を意識して指導すること。

ウ. 第2回外部専門委員連絡会議（平成30年2月28日）

これまでの指導実践を報告し、成果と課題を確認するとともに、次年度に向けた指導上の留意事項や指導体制の整備に関する助言を得た。5人の委員から受けた主な助言内容は、次のようなものである。

- ・通級による指導の成果は、在籍校における当該生徒の行動変容から見取るべきである。通級指導教室は“予習・復習の場”であり、在籍校との綿密な連携体制を構築すること。また、在籍校では通級指導教室においてどのような内容の指導を受けたか、通級指導教室では在籍校においてどのように指導内容を生かすことができたかを当該生徒が報告する場面を設けることで、指導内容がより一層定着することができる。
- ・各拠点校で通級指導を担う教員相互の連携や、各自が用いた教材の共有化及び蓄積のために、拠点校間による情報交換の場を設けること。またその際、指導する生徒の実態、指導の実際、成果と課題等を簡潔に報告し合うようにすること。

エ. 在籍校に対するアンケート調査

他校通級を行う生徒の在籍校に対して、通級による指導に係る教育上の効果、実施上の問題点及び今後の課題等についてアンケート調査を行った。通級による指導の効果としては、次のような点が挙げられた。

- ・生徒が自分の意思を表出する場面が少しずつ見られるようになった。
- ・在籍校とは異なる自分だけの居場所があり、楽しく過ごせる環境があると感じていたようで、自ら進んで拠点校に通うようになった。
- ・在籍校での生活に大きな変化は感じなかったが、連絡帳等を見ると心の安定が図られていることが伺えた。
- ・通級担当者が定期的に来校したり、電話連絡したりすることを徹底してくれたおかげで、当該生徒の状況把握や在籍校における合理的配慮の参考となった。

また、教育上の効果を4段階で評価したところ、いずれの学校も3段階目を選択しており、概ね高い教育的効果を認めていた。一方で、今後の課題については、次のような意見が挙げられた。

- ・今後は、個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成と共有が課題である。
- ・学校間の連携を図り、情報交換していくことが今後の課題である。
- ・通級による指導について、全教職員の適切な理解の深化が課題である。

オ. 保護者に対するアンケート調査

保護者に対しては、通級による指導の効果や満足度について4段階で評価するようアンケート調査を行った。4名中1名の保護者は、指導の効果・満足度とも2段階目を選択した。残りの3名の保護者は、指導の効果・満足度とも4段階目を選択した。2段階目を選択した保護者は、次年度も通級による指導を受けることを希望しており、生徒が一人で生きていく力を身に付けることができるような指導を望んでいる。そのため、在籍校との連携を深めていきながら、個別の教育支援計画や個別の指導計画に基づく、より効果的な自立活動を実践していく必要がある。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

ア. 生徒Aについて

指導開始直後は、自分の思いや考えを言葉で伝えることができなかった。しかし、体験活動の中で、通級指導教員が生徒Aの心理面・体調面に配慮しながら、コミュニケーションを図り、信頼関係を築いてきた結果、公共交通機関に乗ることに抵抗がなくなり、少しずつ自分に自信を持ちはじめ、アルバイトや高校を卒業したら一人暮らしをしたいという気持ちが高まってきた。

イ. 生徒Bについて

指導開始直後は、一方的に自分のことを話し、自分の思ったことを相手に分かるように説明することができなかった。しかし、通級による指導において、興味・関心のある話題で心理的安定を図り、自尊感情を育てることで、落ち着いて相手に分かるように説明できるようになった。また、入試に向けた在籍校の指導と通級による指導の相乗効果で、自分に自信をもつことができるようになってきている。さらに、優先順位の付け方やメモの取り方のモデルを示すことで、先の予定を見通すことができるようになってきている。

ウ. 生徒Cについて

指導開始直後は自分に自信が持てず、目を合わせることもなく、自分が思ったことを話すこともできなかった。しかし、通級による指導の中で、信頼関係を築きながら、興味・関心のある話題で心理的安定を図り、自尊感情を育てることで、目が合うようになり、生徒Cのかかわる人間関係の幅が広がってきた。それとともに自己理解も深まってきている。担任からも、目が合うようになってきたとの報告を受けた。さらに、自分から分からないことを尋ねに来る場面もあり、人とかかわることを避けていた状況に改善が見られる。

エ. 生徒Dについて

指導開始直後は、言葉も単語を発するだけであった。しかし、通級による指導において、通級指導教員が信頼関係の構築を図り、心理面・体調面に配慮しながら指導することで、通級指導教員への信頼が芽生え、思ったことや分からないことを伝えられるようになってきた。

さらに、通級指導の最後の時間に、自分ができること・できないことについての振り返りをした際、真剣な表情をして考えていた。保護者の話によると、本人は「自分の苦手なことは人と話をする事だ。」と言っていたとのことで、今まで自分のことを話さなかった生徒Dに変容が見られた。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

ア. 実施上の問題点

(ア) 他校通級について

他校通級においては、グループ指導が実施しやすい、心理的な抵抗感に配慮しやすいというメリットがある。また、自校以外の他校の教員との人間関係ができ、対象生徒が安心できる場所が増えるメリットがあると考えられる。一方、以下の問題点が浮かび上がった。

- 在籍校との連携
- 通学の負担の大きさ
- 個別の教育支援計画・個別の指導計画の共有化

(イ) 拠点校として

現在の通級指導教室は、普段授業で使用する教室を使用している。次年度以降、対象生徒が増えて使用する教室が複数必要になると、現在の状況では対応が難しい。使用した教材の置き場の確保も必要になる。

また、次年度以降、特別支援教育コーディネーターと通級指導教員が連携し、通級による指導を校内の支援体制に組み込むことが必要である。

その他にも、次年度以降、本格的に通級指導が開始になれば、意図的・計画的な人材育成が必要になる。そのためには、教員の経験年数やキャリア形成を考慮しつつ、校務運営上支障がない形で人材育成を図ることが必要であると考えられる。

イ. 今後の課題

(ア) 体制面等について

○ 外部機関との連携について

高等学校における通級による指導の本格実施に当たり、今後、県教育センター指導主事等から指導・助言を受けることが必要であると考え。また、特別支援学校との連携を図り、対象生徒の指導について相談したり、実際の指導についての協力を依頼したりすることも必要であると考え。

○ 教職員の専門性について

通級による指導は、特別支援学校勤務経験者や特別支援学校教諭免許状取得者が指導に当たることが望ましいと考える。また、特別支援教育についての基本的な知識と理念の体得は全ての教員にとって必須であるため、研修を通してより一層研鑽を積んでいくことが必要であると考え。

○ 指導体制について

複数教員による指導体制を取ることで、対象生徒や保護者の思いを多面的にとらえることができる。また、複数の教員で指導の振り返りを共有することを通して、指導内容や課題等を客観的に整理し、次の指導に向かうことができると考える。

(イ) 指導内容等について

○ 対象生徒と通級指導教員との信頼関係の形成

○ 対象生徒の自己肯定感の育成

○ その他、指導上の留意点

- ・見通しを持たせること
- ・興味・関心のある話題で対話を産み出すこと
- ・コミュニケーションの型を示すこと
- ・指導目標に沿って自立活動の項目を採り上げるとともに、双方向のコミュニケーションを産み出す手立てを考えること
- ・対象生徒が社会人になった時に、どのような力につながるかを常に意識して指導すること
- ・通級による指導と教科・領域との関連性を意識して指導すること

(3) 次年度に向けた準備状況

ア. 聴き取り

初期面談の前に対象生徒の在籍校を訪問し、担任や特別支援教育コーディネーター等から対象生徒についての聴き取りを行い、対象生徒の生活背景や日常の具体的な姿を把握する。

イ. 初期面談（第1回）

第1回は、対象生徒及び保護者と面談する。特に、保護者との信頼関係の構築を目指し、対象生徒に対する指導内容について合意形成を図る。

ウ. 初期面談（２回）

対象生徒との信頼関係を築くための面談で、対象生徒の興味・関心等を把握する。特に、通級指導教員から、通級指導教室が安心・安全な場であることを言葉と態度で伝えていく。

エ. １期の指導（５回）

対象生徒及び保護者、並びに在籍校とで確認した目標達成のための指導を実施する。

オ. １期後の在籍校訪問

在籍校を訪問して、１期の指導経過や対象生徒の変容等の情報共有を行う。２期の指導に向けて在籍校と共通認識を図る。

カ. ２期の指導（５回）

１期の指導後の対象生徒の変容等を踏まえて指導を実施する。

キ. ２期後の在籍校訪問

在籍校を訪問して、２期の指導経過や対象生徒の変容等の情報共有を行う。３期の指導に向けて在籍校と共通認識を図る。

ク. ３期の指導（５回）

２期の指導後の対象生徒の変容等を踏まえて指導を実施する。

ケ. 年度最後の在籍校訪問

通級指導を総括し、在籍校と共通認識を図る。次年度も指導を継続する予定の生徒については、次年度の方向性を確認する。